

## コロナ禍のゼミナール活動における大学生の学び

名古屋女子大学 文学部 准教授 堀祥子



### 1. 学内を飛び出し、街に出るゼミナール

私が現在勤務している大学は4年制の保育・教員養成課程であり、3年次前半に自分の希望する専門ゼミナール（以下、ゼミ）を選択し、配属が決まります。

私のゼミでは美術表現と教育を専門としています。これまで、大学近隣の社会教育施設や他大学と連携して、造形ワークショップを実践してきました。学生が企画、計画と準備、実施まで行い、地域に暮らす未就学から就学児とその保護者や、他大学の学生、教員らと関わりを持つ機会となります。

大学生たちは、日常生活の大半をキャンパス内で同年代の友人・知人と過ごします。また、年長者といえば家族や教員など限られた人たちと過ごしていると考えられます。では、保育・教育実習の機会ではどうでしょうか。学生たちは実習生の立場で子どもの集団と関わります。年下である子どもたちとの出会いや、現場の保育・教育者との関わり、保護者らとの挨拶などの機会も僅かながらあるので、家族以外の年長者との出会いも、他の一般の大学生と比較して多いかもしれません。

しかし、それらの人々も、園や職場から家庭に戻れば、地域社会の持つ多様な背景の中で生活している“素の姿”を持っています。私は、大学の授業の中でその姿をとらえる機会には実は少ないのではないかと疑問から、ゼミ活動でならできる、ゼミ活動でこそできる活動を模索してきました。

造形活動を携えて学内を飛び出し、地域で造形活動を実践する中で、多様な姿の人々に触れ合うこと、そして、多様な考え方に触れる機会は、学生だけでなく教員の私自身にも大きな刺激であり、学びとなっています。

### 2. 上級生に“弟子入り”する

3年次に私のゼミに配属が決まった学生は、造形活動に親しみを持つ者たちです。とはいえ、ワークショップ

は未経験者ばかり。そこで、ゼミの先輩である4年生のワークショップを参与観察すること、すなわち“弟子入り”するところからスタートします。その後は、半年かけて造形分野における自身の“得意ワザ”を探究します。4年生になれば自分の力で、“得意ワザ”を活かしたワークショップを企画、実施し、地域と関わった体験をもとに卒業論文を執筆します。同時に卒業制作も行います。



“弟子入り”の機会の一つとして、毎年参加する企画が「あいちワークショップギャザリング」です。例年8月に所属校の近隣大学を会場に行われ、「こどもとアートとものづくり」をテーマに東海地区の大学のゼミや社会教育施設、一般企業がワークショップを持ち寄り、出展者同士の交流の機会を大切にしながら、学びの場を地域に開いています。ワークショップ初心者の3年生が、4年生の立ち振る舞いを参照し、来場者と一緒になってワークショップを体験することで、今後のゼミ活動を見通す貴重な機会になります。また、4年生には、ゼミ配属時から探究してきた自身の“得意ワザ”と、それをもとに考案したワークショップをお披露目する晴れの舞台でもあります。

### 3. 感染症流行とゼミ活動

ところが、2020年度はコロナ感染症の流行（以下、コロナ禍）に伴い、ゼミ活動の方法変更を余儀なくされました。この原稿を執筆している現在（2021年7月）も同様の状況です。これまで当たり前であった、人と人が集い、顔を合わせ、会話や対話を重ねながら、目の前にある事象を共有することが、いかに大切なことであったかを実感しています。その「当たり前」をいかに担保するのか。コロナ禍当初から多くの教育機関がそうであったように、私のゼミの活動も、状況を伺いながら「学びを止めない」工夫を模索し、試行する時期となっています。

このコロナ禍で、社会全体でICT機器の利活用に注目が集まった点においては、ゼミ活動を実施していく上でのヒントとなりました。オンライン会議システムは遠方にいる人との物理的な距離を埋めるのに役立ちます。日本の発達した運送網は、今日出した荷物を明日、明後日のうちに届けてくれます。また、SNS等は、意見を交わし合うツールとして学生たちにとって馴染み深いものです。

「あいちワークショップギャザリング」もコロナ禍で中止となりました。その代わりに晴れの舞台をどうするか、20

20年度の4年生たちが相談した結果、オンラインワークショップに挑戦することにしました。

#### 4. 活動の様子

オンラインワークショップの対象者には、私の共同研究者の受け持ち授業の学生や、これまでのゼミ活動の中で交流のあった他大学の教員のゼミ学生、私の同僚たちが子どもや孫と一緒に協力してくれました。

皆、「あいちワークショップギャザリング」などへの参加経験があり、私のゼミ活動について理解のあることが共通しています。学生たちのオンラインワークショップは初めての試みでした。不手際や失敗に対してもフォローや助言が期待できる点において、学生も私も安心して身を投げ出すことができる環境であったといえます。

実施にあたり、学生は、ワークショップの材料のキット化からはじめました。画面の向こうにいる相手の立場になって、何がどれだけ必要なかを考えながら、個別に郵送できるようにラッピングにも工夫を凝らしました。次に説明の手順を考えました。オンラインなので丁寧に言葉で伝えることを心がけるようにした上で、写真入りの説明書も製作しました。参加者がひとりでもできるように説明動画も作成し、動画サイトにアップロードし、限定公開としました。卒業論文執筆に反映するために Google の機能を使ってアンケートも作り、リンクを QR コードにして、説明書に添付しました。

次に、機器の取り扱いについて試行しました。オンライン会議システムにつながるためのパソコンに、学生の表情と手元の映像を場面に応じて切り替えられるように、カメラを2台接続して臨みました。事前に練習も重ね、ゼミ生同士で工夫を議論しながら当日を迎えました。





当日、学生は、事前に発送されたキットを手元に置いた参加者を画面上で迎えました。学生たちは緊張しながらも、画面の向こうの参加者にカメラオン、マイクオンを呼びかけ、できるだけ対面時と同様の空間をつくろうと努力しました。説明に終始するだけでなく、対面時の机間巡視同様に、途中経過をカメラに映すように呼びかけて進み具合を確認する場面や、参加者個々の名前を呼びかけながら感想を聞く場面もありました。最後は出来上がった作品を皆で鑑賞してからワークショップを終えました。



実施の時間については、一つのワークショップあたり20分程度としました。制作途中になってしまった場合や、もっと自分でやってみたい場合につながるような進行にしました。キットに同封した説明書も役に立ったようです。

## 5. ゼミ活動における学生の“学び”の所在

今回のオンラインワークショップは2回に分けて行いました。私は機材の準備や使用方法、アンケート作成などの点で最初は手を貸しましたが、2回目は学生たちが主体となり運営、実施することができました。私の手を離れて、学生たちが自立して動いている様子に、卒業時の寂しい気持ちを感じたほどです。アンケートの反応も上々であり内容への教示も多くあったことは、学生の自信につながりました。この経験は学生の卒業論文に綴られることになりました。

ところで、「学習指導要領」、「保育所保育指針」および「幼稚園教育要領」、「幼保連携型認定子ども園教育・保育指針」において、教育課程全体を通して育成を目指す方向として、(1)知識及び技能、(2)思考力・判断力・表現力等（幼児教育課程では、思考力・判断力・表現力等の基礎）、(3)学びに向かう力、人間性等の三つの柱で整理され、一貫性のある内容となっています。

そこで、私なりに学生たちの学びを、上記の三つの柱を元に次のように考えました。

(1)知識及び技能→コロナ禍での社会状況への理解、ICT機器の利活用の為の知識、造形活動において必要な知識や技能の取得など。

(2)思考力・判断力・表現力等→コロナ禍での造形ワークショップ開催に向けての試行、開催方法に合わせた手順の決定、自分の表現の実現など。

(3)学びに向かう力、人間性等→画面の向こう側の参加者へ思いを寄せた造形ワークショップとキットの考案、対面と同じ環境をできるだけ再現しようとする声かけの工夫、事後に参加者が自発的に活動できる手がかりとしての説明書や説明動画の準備、アンケートによる学びの振り返りと卒業論文執筆など。

私は、オンラインワークショップに挑戦した学生の姿からは、幼少期からこれまでの育ちの中で受けた教育の成果を発揮していると感じ取りました。また、その成果は、将来の学生のキャリアにおいて各現場の子どもたちへと反映されることが期待できるのではないかと考えます。

## おわりに

ゼミの学生は、卒業後に現場で造形活動を手がかりにした保育や教育を展開する人たちです。私は、芸術家にならなくとも、生活や社会の中のあらゆる場面において、ゼミでの経験が生かされることを願いながら指導に当たっています。

つい最近も、幼稚園教諭として5年目になる卒業生が来校し、園での製作の様子とともに学生時代のゼミ活動が原点になっていることなど、当時を懐かしみながら語ってくれました。彼女は対面で活動していた頃の世代です。遅くまで学校に残り、友人と議論を重ね、準備をしたり、時には活動に必要な材料を山へ切り出しに行ったりと、コロナ禍ではありえない活動を積極的にしていました。今回紹介した試みと比較することで、対面時の学びの深さも見出せそうです。

今後もしばらくコロナ禍の影響がありそうですが、やれることをやれるときに、知恵を絞って活動を続けていくことが重要だと考えています。

\*文中の写真は全て筆者が撮影したものです。

参考：あいちワークショップギャザリング <http://workshop.ciao.jp/gathering/>